

寺院の瓦から町屋の瓦へ

調査課 小林 新平

考古学コラム「きずな」NO.17

平成30年3月7日

岐阜県文化財保護センター

〈はじめに〉

先日帰省した折に、偶然母屋の屋根瓦葺き替え工事現場に立ち会うことができました。職人さんに話を聞くと、最近では耐震性に優れた軽い屋根が好まれ、私の実家のように瓦を葺く家は徐々に減ってきているとのこと。実家の近所には昔ながらのお家が多くあり、幼いころから屋根に乗るものといえば瓦という印象がありましたので、技術の進歩を強く感じた一幕でした。ところで、遺跡から出土する遺物のなかに、この屋根瓦があるということをご存知でしょうか。現代ではごくありふれた瓦ですが、昔と今とはその形状や使われた場所に違いがあったようです。今回は、そんな瓦の今昔について紹介したいと思います。

〈寺院の屋根を飾った当時最先端の技術〉

瓦が屋根材として使用されるようになってきたのは、古く飛鳥時代（6世紀末～8世紀初頭）にまでさかのぼります。6世紀に仏教が伝来し、それと同時に寺院造営技術の一環として瓦づくりの技術が伝わりました。

朝鮮半島から伝わったばかりの瓦は現代の瓦とは異なるもので、異なる二種類の瓦を組み合わせる「本瓦葺き」という葺き方で寺院の屋根を飾っていました。瓦は当時最先端の技術で作られた製品なので、寺院や役所、宮殿などといったごく限られた場所でのみ使用されていたことが分かっています。

当センターが調査した揖斐郡池田町に所在する高畑遺跡からは、8世紀の瓦が出土しています。調査では建物に関する明確な遺構は見つかりませんが、瓦の出土量が多いことから、かつて高畑遺跡の近くに寺院が建っていたと推察されています。なかでも、軒先に葺かれた瓦には文様が施されており、仏教と縁の深い蓮の花を真上から見た様子を模していると考えられています。



高畑遺跡から見つかった大量の瓦



蓮の花を模した瓦（高畑遺跡出土）

〈城郭の屋根から町屋の屋根へ〉

中世に入ると、寺院や役所のみならず城郭等でも瓦が使用されるようになりました。また、近世でも江戸時代中期以降になると、町屋でも瓦を使用するようになりました。これは、八代将軍徳川吉宗の時代、幕府はそれまで庶民が瓦を使用することを禁じていましたが、江戸の町で大火が頻発していたことから、防火のために瓦を葺くことを推奨するようになりました。ちょうど同じ頃、本瓦葺きを簡略化した「棧瓦葺き」に使用される瓦が発明されました。これは棧瓦と呼ばれ、平らな板の中央が湾曲しており、町屋の普及に大きく貢献しました。これ以降、大都市を中心として庶民の住宅でも瓦を葺く文化が広まりました（上原1997）。

当センターが調査を行った大垣城跡・城下町から見つかった瓦は、本瓦葺きで使用されたものもありますが、その他にも棧瓦葺きで使用されたものが出土しています。



大垣城跡・城下町から出土した瓦

（手前2列が本瓦葺き、奥の列が棧瓦葺きで使用された瓦です）

〈おわりに〉

瓦が飛鳥時代に伝わったばかりの頃は、使用場所は寺院など限られた場所でのみ使用されませんでした。当時の人々にとっては、今まで見たこともない建築技術で造られた寺院は目新しいものとして映ったことでしょう。しかし、時代を経るに従い、城郭や城下町、町屋といった様々な場所で利用されるようになり、その裾野を徐々に広げた現代ではすっかり身近なものとなりました。皆さんのすぐ周りにも、身近なものから歴史を感じるものがあるかもしれません。

〈参考文献〉

上原真人 1997 『瓦を読む』 講談社

岐阜県文化財保護センター2018 『大垣城跡・城下町』

財団法人岐阜県文化財保護センター2000 『高畑遺跡』

山崎信二 2008 『近世瓦の研究』 同成社